

新刊紹介

O. Beul und H. Hammitzsch,
Japanische Geisteswelt, vom
Mythus zur Gegenwart

ss. 419 1956, Halle-Verlag

ヨーロッパの東洋への關心は大分すれば英・佛を中心とする植民地政策から出た諸國家のそれとドイツを中心とする純學問的關心とである。英・佛の東洋に於ける植民地所有から出た必要性は植民地文化として東洋をとりあつかった。決してそれ以上ではない。英・佛は植民地的である。然し今はそれさへもはや歴史とはなつた。これに對するドイツ人の研究は終始學理的要求に根ざす。この點ドイツが舊植民地の支持をうることに現在愈々固くなつた唯一の理由であるともみられる。先きにドイツからグンデルトの「東洋詩集」七百ページの大巻が出て續いてハンブルグ大學のベンル教授は伊勢物語、源氏物語を譯し今、ベンル博士は一休禪師の總合的研究の大成を準備しつつある。ベンル並びにミュンヘンのハミッ

ツ教授はグンデルトと共に多くの異彩あるヨーロッパの東洋研究者の中で大御所となつてゐる。純學理的な研究を特色とするドイツのもう一つの特徴は日本研究を哲學思想との關聯に於てとらへようとするところにある。フランスの日本研究でみるべきものといへば浮世繪のコレクション位であるが、ドイツのそれは日本史の思想史的な理解にまで歩を進めて來た。

本書はハンブルグ大學のベンルとハミツツ博士による日本精神史に關する現代ヨーロッパ最初の研究成果である。今後のヨーロッパ學者の新しい日本研究を示す指針であることは疑ひない。即ち藝術から思想への深まりである。

本書は本文三二九頁・註五九頁・資料一八頁・索引七頁からなる日本思想史であるが、ホーラ・フェアラークの「東洋の精神」叢書中の一巻をなす。同じ企畫の下に西洋・フランス・ユダヤ等諸國の精神史叢書が出されてゐる。第九回宗教學會議に來日したメンツング博士の「佛教の精神世界」も注目すべきその中の一つである。

全篇第六章に分かれ奈良時代より現代に

至る。全篇に流れる思想史研究の特色の一つは日本文學と同時に佛教思想史の把握の仕方であるといへよう。文學史と佛教思想史との精神的融合といふことは、ヨーロッパ人が常に求めるところの方法論である。然もとりあつかはれてゐる文學資料は、佛教に限定されず世阿彌、羅山、平田からロマテイシズムの思想にまで及び、これを凡て「精神的日本」に所属せしむるばかりでなく、それらの諸思潮の示すものは「不安と誇りを持つて他の世界を發見しようとする文化のジネターゼ」にあり、かゝるジネターデへの努力は多くの人々を動かすところのものであると述べる。然し近代の日本人が西歐的精神によつて日本の近代の可能を夢想してゐるが、それは方向が間違つてはゐるはしないかと警告を發し、日本思想史の上に近代化の原理を探索すべき道を指示しようとしてゐる。

なほ本書に用ひられた日本文學資料は凡て著者自らの獨譯であつて、それは新しい構想を持ち、又、近代哲學者として若干の哲學者を批判し、西田幾多郎博士については、その敘述が論理的よりも直觀

的であり全く日本的領域にとどまることをも批判する。單なる文學史でなく、その批判精神の根柢は勿論ヨーロッパの哲學であるがそれ故にこそ東洋の息吹きをば藝術でなく思想を以つてうけとめたのである。藝術を通しての日本研究は多いが哲學思想を以てする根本的理解を示したものとて數少ない研究書の一つである。廣く讀まれることを期待したい。

著者ベンル博士は今(一九五八年九月)在日し一九五九年九月まで一ケ年の豫定を以て一休研究に没頭しつつある。戦前數年滞日したこともあり日本文化のベテランの一人である。又、日本の外國文化の輸入はキリスト敎文化を入れず皮相な取り入れ方であつたと説く人々が日本にあるとすれば、奇妙な植民地的見方である。日本は古來、植民地と違つて個有の文化的傳統を持つてゐる中世的キリスト文化を必要としなかつた。現代ヨーロッパの近代文化が事實果してキリスト敎的傳統の上にあるといへるであらうか。もしそう考へる者ありとすれば、キリスト敎教師のフアナティックな觀察でしかないであらう。近代文化は洋の東西を問は

ず、宗教的傳統と必ずしも一致してゐない。それを如何に基礎付けるかは實は今後の問題であつて、中世的ヨーロッパ敎によつてではない。日本のヨーロッパ觀は中世的ヨーロッパ觀に餘りにわずらひされてゐて現代ヨーロッパに見られるところの「中世的なるもの」と「近代的なるもの」との分裂に批判的限をおほつてゐはしないか。かういふ東西兩洋の文化的交流といふ問題についても、該書はヨーロッパよりも却つて現代日本に於てより深く讀まるべきであり、そこに多くの問題を提供するに違ひない。

(Bspr. von G. H. Sasaki)

Kusum Mitrej, Dogmatische
Begriffsreihen im älteren
Buddhismus-Fragmente des
Dasottarasūtra

ss. 129. 1957 Akademie-Verlag

ドイツ・マカデミー(ベルリン)に藏されてゐる多くのトゥルフアン發見の資料は次ぎ次ぎと貴重な貢獻を斯界に送つてゐる。新しいマヌスクリップトの發見といふことは現在、殆んどゆきすまりの

状態であるといふのが佛敎學の現状である中でドイツ出版の該諸資料は英國のそれと共に世界に誇る二種の尠大な資料の一つである。先きにゾルドシユミッドは一九五〇—一九五三に諸種の原典を出した。最近、シュリンググロフの佛敎シェートトラ、ローゼン女史の律、ヘルテルのカルマブーチヤナが相次いで出版されたが今、このミツテル博士のダシヨツタラストトラはその中、最近刊に屬するものである。

ことに發見整理せられた十上經は巴利長部の終りに出でるものと、コレスボン下なるべきところの根本説一切有部の長阿含の梵文斷簡である。その梵文十上經(D. vol. III, S. 272~293)とサンギーチイ經(D. vol. III, S. 207~271)との價值については既に André Migot の報告がある(Un grand disciple du Buddha. Bulletin de l'École Française d'Extrême Orient, XLVI, Fasc. 2, 1954, S. 526~27)。本經は諸派の律典に傳承され又、ピリザルスキーの漢譯からの翻譯も既に與へられてゐる。律傳によれば七經が代表的經であるが本經はその中の一つであ